

退職にあたってのご挨拶

—お世話になりました—

松 本 真理子

はじめに

母校での奉職も残すところ半年となった残暑の名残色濃い秋の日に、本寄稿のご依頼をいただきました。私にとって人生の大切なひとつの側面であった35年間の大学教員生活を終えるにあたり、大変僥倖ながらこの場をお借りして、私の臨床心理学との出会いとその道筋を振り返る機会とし、ご挨拶に代えさせていただければと思います。

なお論文ではありませんので、どうぞ読み流す程度にさせていただければ幸いです。

名古屋大学とのご縁

若者の代名詞として「三無主義-無気力、無意欲、無責任」という言葉で呼ばれていた時代からさらに「無感動」が加わって、四無主義と呼ばれていた頃に高校生であった私は、代名詞通りの高校時代を過ごし、サルトルやカミュをわからないままに読み耽り、人間存在の意味を一人思考する「根暗」な高校生でした。人と交わることのどこなさを抱え、将来の確たる夢もなく受験期を迎えた私は、日本地図を広げて「行ってみたい場所」として北海道を見つけ「そうだ北大に行って農業だ！（自然が好きでした）」その程度の志望校選択は、父親に一蹴され、それに抗う程の意志もない私でした。親に許可される名大ならどの学部へ行けばいいのか、受験雑誌をぼんやり眺める私の目に留まったのは「異常心理学」という言葉でした。この一言に強く惹かれたことを今も鮮明に覚えています。「人間の異常とは何か、正常とは何か」そうして名古屋大学教育学部とのご縁が始まりました。

臨床心理学の扉～恩師との出会い

恩師である村上英治先生との出会いは学部2年生、臨床心理学入門の講義であったと思います。教養での心理学講義に期待とは異なる感触をもち、専門課程への夢も潰えかけていたある日、村上先生の講義は「学生を泣かせる」との風の噂が流れてきました。私は高まる期待に胸膨らませ待ち遠しくその出会いを待っていました。「村上節（むらかみぶし）」と評判の高い、朗々と謳いあげのような張りのある声で「人間が生きているということ」を、臨床の事例を通して語られる講義に圧倒され、教室のあちこちからはすすり泣く声が聴こえ、そしていつの間にか涙をこらえる自分もそこにいました。私が求めていた心理学はこれだ、という強い確信とともに私の臨床心理学の扉が、その時大きく開かれた気がしました。

臨床現場での体験と挫折～再び名古屋大学へ、そして巣立ち

村上先生の指導の下に、名大式のロールシャハ法を学び、重度心身障害の子どもたちとかかわり、相談室事例と向き合う学部時代は、生きるということを初めて肌で感じ、村上先生の泥臭いとも揶揄されるその姿勢を一心に追って生きる自分がいました。

学部4年次には、村上先生の非常勤先であった精神科刈谷病院へ押しかけ実習をお願いしました。毎週1日、終日を閉鎖病棟で患者さんとともに過ごし、たくさんの人生を聴かせていただいた体験は、自らの生きていることを考えることのできる貴重な機会になりました。

学部卒業と同時に、刈谷病院での常勤職を得た私は、そのまま心理職として奉職することになりました。日々の臨床実践を通して、次第に人生の奥深い世界での患者さんと私とのかかわりが増えていきました。また看護師、ワーカーや検査技師など他職種との交流も深まるにつれて、楽しさの一方で、自らの専門職としての知識と技量のあまりの乏しさに、大きな限界を感じるようになった2年間でもありました。

母校の大学院博士課程に入学を決意し、知識と技量を磨く日々が始まりました。それと並行して、新たな臨床実践の場と研究の場を学外に開拓し、村上先生とは異なる自分の臨床のあり方を考える機会が増えてきたのも事実です。20代後半のことでした。「志高く、怖いものなし」の私の生き方は、今になれば多くの迷惑をかけてきた時代であったようにも思います。研究の場は、県外の医学部医局に移り、昼間は臨床、研究は夜、学会発表や論文はノルマという日々を体験できたのも、その後の研究生活に役立った貴重な体験でした。ちょうどその頃、総合病院小児科での非常勤心理士としてのご縁があり、それ以降私の臨床の場は精神科から小児科へと移りました。小児科臨床では15年間、身体の言葉を介して心の悩みを訴えるたくさん子どもたちやその家族との出会いがありました。小児科医や看護師とチームになって、子どもたちが元気になってゆく人生の歩みにかかわらせてもらう体験は、本当に楽しく、私にとってもかけがえのない人生のひとつまでであったと思います。

教員生活

臨床と研究に夢中になっていた頃、大学教員を探しているというご縁から、よもやの大学教員人生が始まりました。およそ教育者の自分など想像したこともなかったのですが、新しい世界への好奇心が勝り、教員生活が始まったというのが正直なところでした。30代になったばかりの自分にとって、看護職を目指す学生に囲まれ医療の中核である看護職養成に携わることは、新鮮な視点と

意欲につながるものでした。その後、新たなご縁とともに、県外から名古屋市に戻り、キリスト教系大学で次は臨床心理士養成に携わることになりました。自分の後輩となる臨床心理士の養成は、自分に引き寄せて、理想の教育を試行錯誤する良き体験となりました。

その後、これこそ想像すらしていなかった母校での奉職の機会をいただき、2008年4月名古屋大学に着任いたしました。母校での教員生活は、私自身が育った教室の後輩である学生の教育や専門職養成にかかわることができるという大きな喜びと同時に、自らの人生に対するこれまでにない緊張と常にこれで良いのだろうか、という振り返りの日々でもありました。時に、現在の私の研究室辺りの廊下を二日酔いのせいか、ふらふらと揺れながら歩かれる村上先生の後ろ姿が目の前にふと蘇り、村上先生ならどうされただろうか、と考えることも一度や二度ではありませんでした。村上先生から教えを受けた「真摯で誠実であれ」というかかわりや生き方ができているのだろうか、という自問自答を幾度となくしてきました。

悩みながらの14年間でしたが、後輩である名大生への講義と研究・実習指導は、大変楽しく充実し、彼らの優秀さに支えられて、教員の顔をしていられる自分、であったと思います。

研究生活

大きく3期に分けて振り返りたいと思います。
I期：名大法によるロールシャッハ法を携えて臨床に出た私が、県外に出て、医療領域を中心とした発表の場を得たあたりから、名大法だけでは世界で通用しないという体験を重ねることになりました。学会会場で「(名大法ではなく) 共通言語で話してください」と指摘された苦い思い出もあります。その後、当時は世界（といっても米国中心ですが）共通言語であった包括システムを勉強し、包括システムによるロールシャッハ研究を重ねた時代があります。その一環として科研助成によって、現代における日本の子どものロールシャッハデータの収集を行い、国際比較、発達の

研究などを良き仲間とともに行いました。これらの成果は幸運にもいくつかの図書として発刊する機会を得ました。その後、ロールシャッハデータの統計的分析研究と個性記述的接近の両立を目指した私の歩みは、今思えば、村上先生が1950年代に「日本人」研究として大規模なデータ収集、統計的分析研究に打ち込まれた時期を経て「ロールシャッハの現象学」に回帰された経過をそのまま辿ってきたようにも思えます。「～こぼれるほど豊かな生気に満たされているロールシャッハ法が「研究」というまな板に載せられるとなぜあんなにもむなしく、貧しいものになってしまうのか、とう批判と反省に由来する（村上 1977）」この言葉は私が、学内外でのロールシャッハ法の講義で引用する村上先生の言葉です。「研究」と「臨床」の狭間で、悩み迷いながらしかし、ロールシャッハ法を用いた「語り」という優れた人間接近の方法を愛して村上先生も歩まれてきたのだと思うと、私もまた同じように、未だ悩みつつロールシャッハ研究を進めることもお許しいただけるのではと思っております。

Ⅱ期：小児科での多くの子どもたちの人生に寄り添う体験と併行して、子どものロールシャッハデータ収集のために、小中学校の現場に入り、いわゆる一般児とのかかわりが増えてきた頃から、一般児とされる子どもたちの中にも心の支えの必要な子どもたちが、予想以上にたくさんいることに気づきました。2000年頃でしょうか。良いタイミングで、フィンランドと日本の乳幼児保健制度を紹介している図書を見つけました。その中で紹介されていたフィンランドのKeskinenご夫妻（Turku大学、発達心理学、交通心理学教授）に会いに、初めてフィンランドの地を訪問したのが、2003年でした。北欧の国フィンランドでは子どもは「国の宝」とされています。自分の目でそれを確かめたい、という強い気持ちがありました。

その後、ケスキネンご夫妻との研究交流が始まり、奥様のSoili先生は客員として名大に3か月間滞在されました。これも科研に助けられて、日本とフィンランドの子どもたちの心の健康に関する

比較調査、学校環境と子どもの学校生活に関する現地調査を何度も重ねることができました、この一連の研究には、指導院生が代を変えて共同研究者として参画してくれ、また良き仲間にも恵まれて、充実した研究成果を得ることができました。約15年間続きました。

同時期に、愛知県教育委員会の教育委員を仰せつかり、4年間で多くの県内各種の学校を見学させていただく機会に恵まれ、日本の教育現場の抱える課題、解決への困難さなども目の当たりにしました。

15年間に渡る日本とフィンランドの子どもを取り巻く環境と心の健康を考えてきて、今、思うことは、いずれの環境も子どもにとって「光があれば当然影がある」という実に当たり前のことです。付け加えれば、この時期は自身のワークライフバランスに大いに悩む時期とも重なり、フィンランドの女性研究者の教育も研究も、そして週末と長期休暇には森と湖に囲まれた別荘生活も、という生き方に、人生をたびたび考えさせられる時期でもありました。

Ⅲ期：通称知立実習の担当として、着任以来知立の小中学校特別支援学級を巡回してきましたが、その中に、在籍の半数以上が外国にルーツを持つ児童（以下、外国人児童）で占める小学校がありました。特別支援学級の子どもはほぼ全員外国人児童でした。彼らは、慣れた母語で楽しく語り合い、群れるときには特に母語が飛び出します。ある日、それを咎められる場面がありました。「ここは日本だ、日本語を使いなさい」。全国でも群を抜いて外国人義務教育児童生徒の割合が高い愛知県では、彼らの日本語教育が大きな課題として教育委員会の会議週上に上がることもしばしばありました。やはり、私の眼差しは、いつの間にか、この子は幸せなのだろうか、と思わせる子どもたちに向けられるようです。子どものウェルビーイング研究の一視点として日本に在住する外国人児童の幸福感を研究テーマとして、これも科研の助けを借りて、フィンランドやモンゴルとの比較研究を進めることができました。この研究も、院生

や良き仲間とともに楽しく研究を進め、現在も進行中です。

同時期に、学内では学生相談総合センター長を拝命し、それまで体験のない臨床領域であった学生相談にかかわる機会をいただきました。私の臨床体験において初めての領域であり、大変に新鮮であると同時に、学内にこのように多くの心悩める学生がいることを知り愕然とする思いでもありました。中でも本学の特徴と考えられているのは、いわゆる高機能の発達障害圏の可能性高い学生が一定数在籍していることです。彼らの中には、対人関係や研究室でのトラブルなどから、優れた能力を発揮する機会を失い、社会に巣立つことが困難になる学生もいます。

彼らの能力を育て発揮できる教育とは、彼らの幸せとは、ということがいつも頭の片隅にある最近の5年間でした。

新たな研究の発想～今後に向けて

ちょうどその頃、湯川秀樹（1966）の「創造的人間」の文庫本を手にする機会がありました。湯川は「人間の幸福とは何なのか…創造性とは一体なにか、どういうふうに発現するのか…想像力やイマジネーションとかがおたがいに助け合って創造的活動をなしうる…想像力とはなんであるのか…」答えを見いだせずの堂々巡りで、科学者自身がもっと考え創造的科学家の育成をしなくてはならない、と考えていたようです。高機能発達障害青年に潜在するかもしれない特異な創造的能力の育成、彼らの想像する力と創造性へのアプローチを、ロールシャッハ法（投影法）で挑戦してみたい、という新たな発想は現在の研究に至っています。

私の臨床の場を通じた体験とこれまでの研究テーマの新たなコラボレーションが思いがけず最後に誕生したように思っています（こうして振り返ると、日本学術振興会には、常に研究や成果発表を後押ししていただいていたことに気づきました。この場を借りて御礼申し上げます。）

この成果が世に出たときに、おそらく私自身の好奇心は「研究」というスタイルを変えて新たな

スタイルになるものと予想しております。

感謝～臨床の心

私が村上先生から 教えていただいたことは「真摯で誠実な臨床を心掛けなさい」それだけです。その一言でした。20代後半から30代の頃には、他に何も教えてくれなかった、という反抗心が芽生えた時期もありました。しかし、ぐるぐると悩み迷った私がいつも戻ってくるのは「真摯で誠実な」臨床と自身の生きる姿勢でした。

悩み「を」解決してあげるのではない、悩み「に」アドバイスするのでもない、悩む人「と」ともに「歩むこと」こそが臨床の心である、と、ことあるごとに論され村上先生は自らそれを体現されていました。

人間が生きていることはどういうことか、かわるとはどういうことか、泥臭くとも朗々と「生きていること」を語られる村上先生を追っての私の臨床・研究人生をご覧になって、村上先生は何と言われるのでしょうか。「真理子にしては、まあまあよく頑張ったなあ」と言って苦笑いされることを期待しております。

本学では、14年間の奉職でありましたが、学部生、院生と指導会を支えてくれた指導学生皆様にまずは厚く御礼申し上げます。皆様の若いエネルギーに支えられ、楽しく臨床事例の検討や研究を進めることができました。また、これまで多くの研究を共に進めて、お付き合いくださった良き研究仲間皆様にも深く感謝申し上げます。皆様とのディスカッション、海外調査や成果発表はいずれも私にとって本当にかけがえのない楽しいひと時であり体験でした。そして、関係する教職員皆様、学生支援本部スタッフ皆様、多動傾向の強い私にもかかわらず、温かく包容してくださり、支えてくださったことを深く感謝申し上げます。

私がこうして14年間の奉職を無事終えることができますのも、ひとえに、皆様のお陰です。本当にありがとうございました。そして一言だけ、加えることをお許しいただき、ここまでよく付き

合ってくれた家族一同、特に数限りない不便と不自由と迷惑をかけてきた私こと、母親につきあってくれた2人の息子にお詫びと感謝申し上げます。

最後に、私が教員生活の間、机上にずっと飾ってありました村上先生のお言葉を、私に臨床心理学の道を開いてくださった感謝の意を込めて紹介させていただきます。

どうにもならない運命がある。しかし、その運命をひきうけ、あるがままの自分として生きつづけていくことに、この世に生まれた意味がある。そして何よりもそれを支えてくれる他者がいる。

まなざしーみつめあうために

ことばーはげましあうために

こころーかかわりあうために

お互いみつめあう眼と眼、はげましあうことばとことば、それをとおしてはじめて人のこころは深いかかわりをもちあうことになる。

村上英治（1992）

AIやロボットが活躍する時代、いずれ優秀なカウンセリングロボットもできることでしょう。

そして今、コロナ禍によって人と人が物理的に距離を取ることに慣れてきた日常は、心と心の間に埋めようのない隙間をもたらししているのかもしれませんが。そのような時代においてもなお泥臭く「人が生きるということ」は大切にされることを祈ってやみません。

教育学部中庭では今年も優しい香りとともに金木犀が可憐な黄色い花をつけ始めています。コロナ禍を象徴するマスクを超えて、金木犀は変わることなくその香りとともに私に思い出を運んでくれています。

長い間本当にお世話になりました。

引用文献

村上英治 1977 ロールシャッハの現象学 東京大学出版会

村上英治 1992 人間が生きているということ 大日本図書

湯川秀樹 2017 創造的人間 角川ソフィア文庫（1966 筑摩書房刊行）

